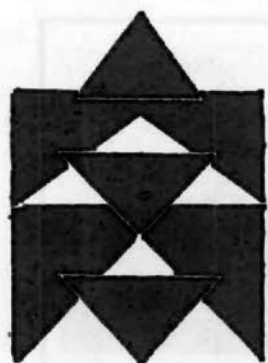


1982



高崎高校同窓会報

発行所
高崎高校同窓会
〒370
高崎市八千代町
2-4-1
TEL
0273-24-0074

第16号 昭和57年12月5日





高高精神の充実を 同窓会長 原 一 雄

同窓会の皆さん、益々お元氣御活躍のことと存じます。

昨年は母校の野球部が八十四年の歴史の中で、始めて甲子園の土を踏み、その募金のため皆さんから多大の御芳志を頂き誠に有難う御座いました。御蔭で各クラブ活動も、一せいに花が咲いた様に開き、サッカー部の全国大会出場を始め、軟式庭球の全国大会第三位等見事な成果を示して参りました。

同窓会の活動に致しましても、昨年の五十回卒業生により引きつがれた今年の総会は、五十一回の方々の手によって見事に運営され、総会議事の決定と共に、親睦交流の機会をもつことが出来まして盛大な成果を示しましたことは御同慶にたえない処であります。

五十七年度は、母校におきましても校長も全日制通信制の教頭も全部交替され、誠実に熱心に指導に当たられた中沢誠一校長が、水穴再喜校長に交替されました。鋭敏、果敢な新校長のもと、母校に更に清新の氣風を吹きこんで頂くわけでありますが、学校の施設は先輩の方々の努力によ

り、既に本校舎の新築が完成し、運動場の完備と相まって、北関東第一級の恵まれた状態となっており、更に本年は待望の水泳プールの移転も決定しておるのであります。

歴代校長や井上房一郎さん始め諸先輩の力により、学校はその庭園の隅々まで、実に氣品高く優雅で格調高い姿となりました。更に望む処は、学業知識の進歩向上による進学率の進展と共に、人間の生涯の生き方を定めるこの大切な若い三年間に、清潔であり廉直であり、剛健素朴であつて、悪をきらい卑劣をにくみ、熱い涙をもつ暖かい友情と、困難に会えば更に激しく反撥する不屈の精神を養うことが、何よりも大切ではないかと思ひます。

そうしてそれこそが高高精神であり、いずれは世に立ち、後代の日本を支える若い人達に、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という精神と共に、人間の基本的尊厳と自由は、命にかえても護らなければならぬ大切な覚悟ではあります。が、同時に人に迷惑をかけてもかまわないという、手前勝手な自由は

存在しないという事も知ってもらい度いと思ひます。

幸に水穴新校長が、既に新聞にも報道されておりますが、「校長室は生徒のサロン」として、毎日七人の生徒と対談する姿が写されております通り、強い意欲をもって新しい努力を示されている事は有難い事です。私達卒業生は、わが高高の歴史の、益々光り輝くことを祈つてやみません。

同窓会の活動も、新たに制定された本部幹事会の皆さんが、理事会常任理事会の決定をもととして、絶えない努力を続けて下され、会費の納入も会員の皆様の御熱意と相まって飛躍的に増えて参りました。そうして御蔭で新装なった充実した本会報を、皆様の御手もとに届けられる様になったのであります。会員の皆様も、維持会費の納入につきましても、格段の御熱意御協力を示して下さいる様お願い申し上げます。

母校の益々の発展活動と、同窓会員皆様の益々の御隆昌をお祈り致します。

(群馬米穀株式会社社長 二九回)

高高同窓会報 No. 16

目次

高高精神の充実を

同窓会長 原 一雄 2

三F精神の継承を

学校長 水穴 再喜 3

希望

副会長 真下 英夫 4

母校の現況

P.T.A会長 塩川 祐次 4

学習意欲の喚起を

教 頭 高宮 正夫 5

通信制をよろしく

通信制教頭 小林 仲治 5

青春雑誌

重田 精一 6

国民体育大会に想う

浜名 一雄 6

真智と教育

南雲今朝雄 7

校歌制定秘話

安居 次夫 8

私の回想記

高々新聞創刊のころ 萩原富士雄 10

総会と消えたキャンパス

田中 順 10

訪中して

ファイヤーストーム 新井 浄 10

小林 優公 11



ごあいさつ

学校長 水穴 再喜

幾多有為の人材を輩出している伝統ある名門校高崎高等学校に赴任できたことを心から喜んでおります。これから同窓会の皆様方いろいろなとお世話になるわけでございますがどうかよろしくお願いいたします。

私が今考えておりますことは、絶対に名門校の名まえに甘えてはいけないということです。生徒達が人格識見ともにすぐれ、身体強健な人間として成長するためには、それなりの教育活動が高々において行われなければなりません。校長として現状を拱手傍観するわけにはまいりませんし、先生方も現状に満足しているわけにはまいりません。伝統を継承しさらにそれを発展させなければなりません。

何代か前の校長が、本校の教育方針として、三下精神ということをお説かれました。即ち、ファイティング・スピリット（敢闘精神）フェアプレー（公明正大、正々堂々）フレンドシップ（友情）の三つであります。

私もこの方針を受け継いで青年らしい青年の育成に努力してまいる所存でございます。また先代校長は、この方針を堅持しながらも、文武両道を説かれました。私が赴任して六ヶ月が経ちましたが、この間に感じましたことは、「武の面」ではかなりの成果があがっていることでございます。群馬県高等学校総合体育大会では第二位の成績であり、軟式庭球とバスケットボールは全国高等学校総合体育大会に駒を進め、野球部も準優勝で関東大会への出場権を獲得しました。運動部は勝って当り前という風潮さえ生じ、高々生の志気は高揚しています。学芸部も負けてはいません。将棋部は全国第三位という成績をあげました。

私が心配しているのは「文の面」です。一言に言えば、高々生は勉強が足りないということです。すばらしい素質を持った生徒の集団でありながら、全体的に見て家庭学習の時間が少な過ぎます。ほとんど全

員が大学進学希望という現状でありながら考え方が甘いのです。たしかに進学については、県下では一流校と言われても、全国的に見ればまだまだ二流・三流であると私は思っています。

この現状をどう改革するか。ここに私の課題があり使命があると考えています。金剛石を磨く仕事で、全職員一丸となり、共通理解をもって行われなければなりません。と同時にしっかりと家庭学習が必要であり、同窓会やPTA等教育関係団体の皆様方のご支援、ご協力をお願いしなければなりません。日本に高々ありと言われるような学校づくり、それが私の念願です。よろしくお願いいたします。



論壇 これまでの二十年

これからの二十年

高木 賢 12

同窓会だより

京浜地区 上利 嘉野 13

関西地区 福田 一郎 13

高朋会 清水 豊 13

高崎市役所懇談会 磯部 和男 13

大学生からの便り

早稲田大学での四年間 神戸 敏之 14

教育実習を終えて 丸橋 一博 14

ラグビー一色 村田 毅 14

母校だより

第36回高々・前高定期戦 大逆転V2 松井 照明 16

運動部報告 中原射鹿止 17

学芸部報告 田島 秀雄 17

最近の進学状況について

経徳 弘康 18

第81回高々同窓会

新年総会のお誘い

岡村 品夫 9

翠嶺文庫 15

維持会費納入のお願い 19

会計報告 20

庶務報告 20

事務局だより 20



希望

同窓会副会長

真下 英夫

高崎中学!! それは自分の母校であると同時に、いまになってみると実家のような存在である。というのは、自分の父が高中の教師として奉職していた関係から、教壇に立たれる先生方は、父の仲間であると思うと、一種の親しみを感じ、また父から先生方の噂なども聞くことが出来たので、一層の親近感を持ったものである。

このような高崎中学を卒業し、五十四年、同窓会にも入れて戴いた。が、なかなか同窓会運営の満足な目的達成が得られないでいる。

会員の皆さんが、少くともかつての高崎中学、現在では高崎高校へ、天下の高中へ、天下の高々へ大きな希望を持って入学を望んだことであろう。万難を排して高中なり高々へ入ったことで、日々を過したことであろう。その時分の気持を持っていくなら、否、持っているべきであるから、同窓会には極めて深い関心と熱烈な協力が戴けるべきである。自

分達は、戦前の教育勅語による教育を受けているので、いまの若い人々とは考えが異なるかも知れないが、世話になった学校のことを全く考えないというのは、極めて淋しいと思う。というより、むしろ気の毒に思える。

第二次世界大戦で空襲に会い、地方へ疎開した際、また再度東京へ進出するに当り、全面的に同窓会の皆さんにはお世話になり、激励もされた。会員は、社会の各界で活躍されており、声を掛け、訳を話せば、何かと声援願える実に有難いものであり、私はこのような同窓会の一員であることに、この上ない幸せを感じている。高々卒業生諸君よ、同窓会を見直して欲しい。改めて見直すべき好もしきがありますぞ。

高々同窓会諸君に栄あれ!!。
(清光堂春英社代表取締役 二七回)

母校の現況

今年五月、高崎高等学校PTA総会においてPTA会長に就任致しました。会長に就任後何回か母校に伺い、全面改築された校舎、充実した機器、すっかり整備された校庭、ここで学ぶ生徒は幸せだとつくづく感じているしだいです。しかし高々で大切な事は建物施設よりそこで営まれている活動であり、その活動を支える精神であると思います。この精神と永い伝統という良きバック・ボーンとが相俟って、不屈の精神を秘めた校風が確立するものと存じます。

この伝統的精神を培う方法の一つと考えられるのが、古くから高々で強調されて来ました文武両道の精神だと思えます。今年も五月の群馬県高校総体で総合第二位という好成績を収め、スポーツの面ではすばらしい成果をあげております。しかし、「文」の学習面では、全般的に勉強不足、努力不足が感じられる様です。過日のPTA総会で水穴校長先生

PTA会長 塩川 祐次

が、生徒の家庭学習時間の短いのを嘆いておられました。平均一日二・三時間、なかには一時間未満という生徒もおるそうです。これでは希望する大学に、入学はムリでしょう。私は高々の生徒たるものは「自分の事は自分でやれ」即ち、受身になるなという事を声を大にして云いたいのです。今の生徒は教えられ過ぎて、いるように思います。学校に頼り、塾に頼り、家庭教師に頼り、そして自分を見失ってしまっている。泥くさくても良い、最後までゴシゴシ勉強して問題をねじふせる様な氣力を身につけてもらいたいと思います。そのためには、平凡だがやっぱり練習問題をたくさんやることだ。家庭学習時間を多く持つ事だと思ふ。学習意欲(氣力)と学習時間の確保こそ、最後に笑う者の必要条件だと思ふ。県下有数の進学校としての面目を維持するために、PTAも全力を傾注致しますから、同窓会も御支援御指導をお願い致します。(五〇回)



学習意欲の喚起を

教頭 高宮 正夫

着任して半歳、淡い緑に芽ぶいたばかりであった校庭の銀杏も樺も紅葉しはじめました。あわただしい時の流れにそぞろ感慨を催す昨今ですが、編集子の求められるままに所感の一端を述べ、新任のご挨拶にかえたいと存じます。

ご承知のように、本年度も部活動を中心にはば順調に成果をあげております。これは、伝統の「三下精神」と、顧問の熱意溢れる指導とが感応しての快挙と申せましょう。年来提唱されている部活動の振興、充実の目標は着実に具現しつつあるとひそかに自負しております。

学校生活の中心をなす学習についての評価は、然るべき試金石に遭遇しておりませんので、目下のところ明確にくだすことはできません。しかし、生徒の学習意欲の低下、学習時間の不足がしばしば指摘され、授業の「虚」を衝くような質問が乏しくなったという嘆きが聞かれるのが実情であります。私どもの危機は実

にこの一点にあつて、学校をあげて学力の向上、学習意欲の喚起にとりくんでいられたいであります。

教頭の職務は、学校長の意を体して、生徒の実態、保護者の願いを的確に捉え、教職員が持てる力を十分に発揮してこれらに対処し、応えられるような条件を整えることにあります。承知しております。凡庸な身には言うべくして実践の極めて困難なことでありま。幸いなことに、経験豊かで行政に明るい学校長のご指導や、数多くの有能な先生がたの力強い支えがあります。このような恵まれた条件のもとで、磨けば宝玉となるに違いない璞ともいうべき生徒たちが、二十一世紀の日本をたくましくリードする存在となることを期待して努めてまいります。

同窓の皆さまがたのご指導、ご支援を衷心よりお願い申し上げます。



通信制をよろしく

通信制教頭 小林 仲治

縁あつて高々へ赴任してから瞬く間に数ヶ月が経過した。昨年まで富高で、富岡地区の優秀な中学生を何とかして富高へ入れたい、つまり高々へ流れないようにと、長年腐心してきたことが今となつては懐しく想い出される。

伝統に輝く高々の名声は、周辺校に、あるいはその地域の父兄や子供達に、いろいろな意味で大変なものがあり、それをつき破ることはとても不可能なように思われる。それだけに本校に学んだ人達、今学んでいる生徒諸君は幸せだと思ふ。と同時に学校にはそれに応える責任があり、先生方が日々努力しておられる姿に敬意を表します。

さて私は通信制勤務であるが、通信教育についての知識もなく、これまで関心を持っていなかった。通信教育の複雑さや奥深さをしみじみと感じている。高々通信制の現況を略記してみる。卒業総数一〇五、在籍数約六〇〇。在籍者の年齢が全日制

ではとても考えられない構成となっている。三〇才台が約二〇〇、四〇才台が一〇〇名以上いる。これらの中で特に女性が多く、家事に育児に職業を持ち、そして高校生である者が多い。高校教育の中にこうした姿もあることを世の人達に知ってもらいたい。そしてこれらの人々の期待にそえるよう努力しなければならなと思う。二〇年以上もかけて卒業の栄冠を手にした者もあると聞く。いきの長い忍耐のいることである。十数年前から私は盆栽を趣味としていた。一年で終る草花とちがつて一本の盆栽を仕上げるにはいきの長い忍耐と植物に対する愛情が一番大切である。何か通信教育に通ずるものがあるような気がする。両方を大切に行きたいと思う。

高々同窓生の皆様、どうぞ通信もよろしく。

青春雑記

重田 精一



昭和十四年三月、旧制高崎中学校を卒業した我々は第三十八回、クラス会は三八会という。

同窓会の名簿をみると、三十七回、三十八回、三十九回というクラスは、戦争のため多くの仲間を失っている。青春とともに楽しみ、ともにかなしみあった。前途有為の人々が、いわれなき戦いに若い貴い生命を、散らしていったことを思うと、残念でたまらないのは筆者一人ではあるまい。もう決してあんな事のないようにと念じるのみである。

よく学び

真新しい二本の白線の帽子、新しい制服をまとった、新人生は、課目ごとに替る先生の授業に目をみはり新しい同級生にも好奇の眼をむける。

二年生のときだった。大塚雅彦君（現お茶の水大学教授）が作文に、「隔靴掻痒」という言葉をつかった。なんのことやらわからず、辞書をひいた。えらいむずかしい言葉を知っているものだと思心もした。

辞書を手軽にひいてみる習慣は、高崎中学校で先生方にしこまれたも

のであり、感謝にたえない。もつとも、家の子供たちには、すぐに辞書をひいてみたかといつては、一寸拒否されたけれども。

よく遊び

四年生のとき、日本サッカー連盟が、サッカーの底辺を広げるために指導者を全国に派遣し、中学生の講習会を開いた。筆者はなぜ、この講習会に参加したのか、よくわからないが、ともかく、高崎商業校庭で、講習をうけた。その後チームを作つて、冬に県下大会をやるといわれ、翌年藤岡中学で大会が開催された。野球部、バスケット部などからも応援してもらい、長井章君（陸上・戦死）などキャッチャーミットを素手にかえて手伝ってくれた。

午前の一回戦を勝ち、昼食にたのんでおいた「カツ丼」がとどくのがおそく、午後の前橋商業戦には、腹ふくる状態にて、ついに敗れてしまった。本年夏のサッカー部の大活躍をみて、今昔の感があり、昨年春の野球部の甲子園出場とともに、若い現役の高校生が練習の苦しい結晶

を、あのような輝かしい成果に結集していることは、うれしいことである。

三八回のこと

戦後、恩師の市川三郎先生（現群馬ゼミナール校長）が中国から引揚げてこられたので、三八回はすぐにクラス会が開かれた。その後、清水幸正、林静男、桜井途次郎君などを始め、高崎市在住の同級生が中心となり、市川先生をかこんでの三八会が、事あるごとにひらかれている。一昨年の市川先生、勲四等瑞宝章の叙勲の栄誉をうけられたことは、我我一同なによりの感激であり、皆でささやかながらの祝賀会をひらいて先生のますますの御健勝と御活躍を祈念した。

卒業してから、四十年以上たってしまった今日、高崎中学での追憶は忘れ得ぬことばかりであるのも、年の故であろうか。

母校のますますの発展と、同窓会の皆様の御健勝を祈念いたし、在校生の勉学、スポーツへの精進をお願ひいたしたいと思ひます。

（日本医師会常任理事 三八回）

いよいよ第三十八回国民体育大会（五八年）も来年にせまり、県内各種連盟も、選手強化に余念のない活動を、展開しているのは、たのもし限りであるが、勝負の世界であるだけに現実には容易でない。

過去の実績を見ると、新潟大会以後主催県が常に優勝しているが、それには幾つかの条件がある。例えば主催県は地区予選なしに、全種目にエントリー出来ることによつて、底辺が大きくなり、勝利の歩止りが多くなる。また組合せも主催県の手の内にあるという特典が与えられるのである。

近年宮崎、滋賀、島根と何れも小県が優勝しているのも、こうした理由によるものと思われる。特に島根県は中でもジュニアに強化の重点を置いた様であり、それが見事に成功した模様である。

群馬国体は四〇種目位になるだろうが、そのうち八〜一〇種目の優勝がなければ栄冠をつかむことは至難

に 想 う

一 雄



真智と教育

南 雲 今朝雄



古来日本では「嘘(うそ)も方便」と言った考え方が通用している。仏典から出た言葉であり、巧妙な嘘言のいえる者を、知慧者だと認めたりする風潮すらある。

しかし、斯様なことは、青少年に学問をさずける教育の場において通用したのでは、まことに困ったことになる。——人間にとって、真実を知る知識、その価値はあらゆるものに最優先するものであり、まずそのことが尊重されねばならぬからである。人類の文化は、そのことによつて築かれてきたのであり、科学が尊重され、智者が尊敬されるのも、そのことのためである。

教育は、その「真智」を教え育てることによつて、青少年の人間の成長をたすけるそれが、第一の主眼であり、また目的とされなければならぬ。——正しく成長し、正しく生きるためにはまず、人間社会の現実現象、世間の実態や、そこにあるさまざまな矛盾を見分ける知的能力が必要なのである。そういう事がらを、感情だけの好悪で判別するのではなく、知的な志向が出来るように、青

少年を育成するのが、教育事業の存在意義である。

最近、高等学校の社会科(歴史)の教科書について、国際的な物議がもし出された。その内容に偽りの表現があると言うものである。——教育に用いられる教科書に、誤りや偽りがあつたのでは、教育の目的遂行に、大きな支障となるのは、多言するまでもないことだ。しかしそのことは、教育される青少年に取つての問題であつて、国家社会の経済問題でも、国際政治の問題でもないことを、このさい総ての関係者が、明確に認識していなければならぬ。

古来この国では、こと歴史に関する限り、嘘(うそ)も方便式の、講談的史書が優遇されてきた。そのため、今日では、国政にたずさわる行政官でも、報道を担当するジャーナリストでも、歴史を知るそのことを趣味の問題と考えているものが少なくない。過去の史実を知り、そのことによつて現在ある実態を認識することの重要さを忘れている。

「嘘も方便」と言つた考え方にしても、真実を知る者にして始めて嘘の

効用を思いつくわけである。それはどこまでも、言語の表現だけの問題であり、真智の価値を否定したものではない。今日しばしば物議をかもしているマス・コミ報道の誤りは、「方便として用いた偽報」と言つたものではなく、無知の所行である。また、無責任な放言を乱発している政治家たちの表現にしても、およそ智者が用いる「方便」などと理解できるものではない。こと史実に関する限り、講談講釈のいきから出るものが出来ないでいるのだ。

——何ごとにつけても、その真実を知ることの価値は、すべてに優先するのだと言うことが、近來、甚だ粗略に意識されている。「その事にどんなメリットがあるのか……」と言つた経済的、あるいは政治的な判断が常に優先されている。そのようなことは、人間個人に取つては二義的な問題であり、そんな判断が、教育という学校の作業の中に持ちこまれるのは、厳にいましむべきである。

(聖マリアンナ医大名誉教授・相談役 二二回)

国民体育大

浜 名

であろう。また敗北した時の一般国民の批判も、手厳しいものがあることは必定である。そうなると指導陣も選手も身の置処に苦しむことになる。

対策は只一つ、選手強化にある。島根に学んでジュニアの強化に力を注ぐべきである。単にジュニアを育てることは、その場限りの策ではなく、将来に夢をつなげる最良最大の方策であることを熟知しなければならぬ。

ではその中心勢力は何れに求むべきか。私は思う、それは各種連盟と高校に托すべきものと思うのである。何故か、そこには純粋な情熱と発刺たる体力と培われた技術があるからである。

こうした人々によつて育てられた、ジュニアは単にスポーツだけではなしに、将来群馬を背負う人材として大きく伸びゆくものと思うが故に私は期待するのである。

(群馬県体育協会会長 二二回)

校歌

草野 心平作詞

芥川也寸志作曲

上州の三つの山ははるかにかすみ

セルリアンブルーの鳥川は流るる

高きを求む夢の如くに榛名山

白き雲沸きバラの香匂ふ学び舎

にて友よ健康と真理かち得ん

高崎われらが母校

未来よ燦とかがやけ

群青の天に日輪その下にして

組むは精神と智慧のスクラム

清純の美を生きる如くに赤城山

堅雪光り風吹きささぶ学び舎

にて友よ頼あつく理想追はなん

高崎われらが母校

伝統よ更に栄えあれ



校歌制定秘話

安居次夫

戦後、学制改革により、高崎中学が高崎高校として新発足したのは、昭和二十三年のことであるが、その頃から、旧中学時代の校歌は歌われなくなっていた。その歌詞の一部が、主権在民となった新しい時代に、ふさわしくなろうという理由かららしく、入学してくる生徒に教えなかつたからである。

それで、校歌を斉唱する儀式のような場合には、「翠嶺影を浮かべては……」ではじまる応援歌を歌わせて間に合わせていた。だから、その頃の在校生達は、「翠嶺」の歌を校歌と思いこんでしまったようである。

——新しい校歌を制定しては、という動きが表面化してきたのは、田中悦平校長の頃である。

たまたま昭和三十六年が創立六十周年に当たったので、その記念事業の一つとして、新しく校歌を制定しようとの案を出したのは田中校長だった。

当時、私は教頭の職にあったが、校歌制定委員会を設けるようにと命

令された。そこで、委員会には、校内の職員の外に、同窓生にも加わってもらふことを考え、依頼したメンバーは、井上房一郎、豊田勇、田島武夫、原一雄、滝川決男、星野行弘の諸氏だった。

最初の委員会で、出来れば卒業生の手になる歌詞をという声が出て、土屋文明先生の内意をうかがうことにしたが、先生のご承諾が得られず、この案は沙汰やみとなった。

そこで、誰れに依頼したものかという論議が重ねられ、候補者として挙げられた詩人は、次に列記するような人々である。

村野四郎、三好達治、堀内敬三、大木惇夫、草野心平、勝承夫、藤浦洸……

候補者は決まったものの、こうした人々に依頼した場合、どのくらいの謝礼を払えばよいかを、校長は気に病み、至急、それも調べてくれと言ったのだ。

調査の結果は、最低に見積っても十万円ということなので、それを報

告すると、校長は、一瞬はつとしたような表情を見せてから、首を横に振った。

「駄目だ、駄目だ、高すぎる——。予算は、全部で十万円しかないんだ。僕の考えでは、作詞料五万円、作曲料も五万円。それ以上は、一円だつて出せない」

さらに、言葉をつづけた。

「なんとか、縁故でもたよつて、五万円にまけてくれる詩人を探すより外にないな」

この予算については、委員会の席でも、一歩も譲ろうとしなかった。どうしたものだろうかと、私達は顔を見合わせるだけだった……

そんなことがあって、半月余りも経った頃だろうか、校長は笑顔を浮かべながら、私の席にやって来た。

「校歌の方はうまくゆけらしいぞ。」

草野心平さんが、承知してくれたそう。豊田勇さんが親しくしているのだ。無理に頼みこんだらいいんだ。

学校は貧乏だから、謝礼も思うようには出せんということでした。了解しても

らったそうさ。どうだろう、草野心平では……」

とにかく、私は、委員会を招集して、皆に諮ってみることにした。

その会で、意見は一致した。草野さんなら、若い頃前橋に在住されたこともあり、上州の地とは縁故の深い詩人である。それに、何よりも、校長の希む斬新で異色ある校歌を——という要望に応じてくれる詩人と思われる。豊田勇さんの労を多とし、お願いしようではないかという結論が出た。なお、豊田さんの言うには、作曲の方は、草野さんから直接芥川也寸志さんに依頼してくれるとのこととで、作曲家も決まってしまったのである。こうもうまく、話がまとまろうとは、誰れも予想していなかった。

それでも、校長には、なお一抹の不安はあったらしい。次のような言葉を漏らしたことがある。

「この間、草野心平さんの詩をいくつか読んでみたんだが、変った詩ばかりだな。少し変り過ぎていいるよ、あれは……。大丈夫だろうか、校歌は……」

特異な詩風を樹立したこの詩人が、どのような校歌を作るか、私にも、それは、興味深いことだった。

私が、この詩人に、初めてお目にかかったのは、昭和三十六年二月十三日のことである。

その日、紺紺の着物に袴をつけ、

黒のマントを羽織って学校を訪れた詩人は、その年令（五十五歳）から想像していたより、はるかに若く見えた。

よく晴れた日であったが、校庭には、相変らず、砂塵をまき上げる風が吹きまわっていた。新校歌の第二節に（風吹き荒ぶ学び舎）とあるのは、おそらく、詩人にとって、この日の強い印象だったのだろう。

一人で歩いてみるから、案内はいらないと——、校舎の内外を時間をかけて歩いた後、詩人は、校長室で開かれた委員会の席に臨んだ。その席で、私達は、あれこれと、新校歌に対しての注文を出した。ぶしつけなことも言ったが、詩人は終始うなずいてそれを聞いてくれたのである。

その夜、詩人を囲んで、歓迎の宴を料亭「末廣」で開くことにした。その席で、酒の入った校長と詩人との間にとり交わされた問答の顚末なども、二三書いてみたいとは思いますが、私に与えられている紙数は、もはや残り少ない。その一端を記すにとどめざるを得まい。

草野さんは、詩壇でも名うての酒豪である。

コップのビールを、まるで水でも飲むようにグイグイとあける。

かたや、田中校長もこの道では、誰れ知らぬ者のない豪の者。

こちらは、酒とビールのチャンポンである。酔いがまわるにつれて、

詩人に対しても、草野先生が草野さんになり、やがて、心平さんに変ってしまふ。

「のう、心平さんよ、あんたは随分詩を書いているようだが、その詩で、今までに何人ぐらい女を泣かせたかね……」

「僕は、女を泣かせるような詩は書かん」

「そうか。そういうことでは駄目だ詩人たるもの、時には、さめざめと女を泣かせる詩も書かんことには詩人とは言えん。僕は、千人の女を泣かせたことがある。それも、花も恥じらう乙女ばかりだ。講堂で僕が話をした時、みんな泣いた、千人の乙女がだよ……。どうも女を泣かせることにかけては、心平はこの悦平にかなわんようだな」

千人の乙女を泣かせたというのは、沼田高女で校長をしていた頃の話である。どうやら、詩人の方が押され気味だった。

後に、草野さんは、田中校長を評して、高校の校長で終らせるには勿体ない人物だと、感想を漏らされたとか。

その田中校長も、豊田勇さんも、今は亡い。お二人とも、高々をこよなく愛された人であったが——。

（元本校学校長）

第八一回高々同窓会 新年総会へのお誘い

当番期代表 岡村品夫

同窓の皆様、高々同窓会新年総会をご存知ですか？ タイトルの如く八十一回を数えることとなりまして、二年前から、その設営を卒業各期で行うことになって、以前より数倍の参加者を得て、明治大正昭和に渉る同窓生が、楽しい語らいのうちに、大きな成果を挙げております。今回は同窓会役員、学校当局と相談の上、上越新幹線の開通で、更に伸びゆく群馬の玄関口である高崎ターミナルホテルを会場に決定致しました。私達五十二期が当番期となり、責任の重大さを感じつつも、皆様方に充分ご満足頂け、夏に有意義でより活潑な会に発展出来るよう念じて意欲的に準備中でございます。同窓生の皆様、懐かしい往時を偲ぶ場となればこの上ない幸です。どうぞ声をかけあい振るってご参加下さいますようお願い申し上げます。

期日 昭和五十八年一月二十
二日（土）
時間 午後三時
場所 高崎ターミナルホテル
（丹頂の間）
会費 四千元

私の—
—回想記

(その2)

高々新聞創刊のころ

萩原富士雄

高々高校新聞の創刊に関わった一人として当時の思い出を綴ってみる。我々が高々二年(昭和二十四年)の頃は学制改革により新制高校となつて日も浅く高々にも新しい空気がゆれ動いていた。生徒会、文化祭、前高定期戦、全校マラソンの復活等始まったのもこの頃である。学園内でのクラブ活動も学芸、運動とも活潑になってきた。全国的に学校新聞が発刊され始めたのもこの頃だった。生徒会の文化部長だった私は、何か新しいことをやってみようかと思つていたところ、小学校(東京宮前小)からの友人だった新実君(現毎日新聞編集局次長)が当時都立上野高校生で学校新聞に熱中していた。時折会々と学校新聞の話聞かされ高々でも作ってみたらと再三啓蒙された。そこで生徒会長だった一級上の岸岸さんと同期の田村(現熊谷駅長)に

話し学校(内藤校長)に新聞部を作りたいと申し入れた。生徒指導は小池坂先生だったが若干の紆余曲折はあったにせよ私の希望は通った。行きがかり上私が新聞部長となり顧問には気鋭の大塚先生(のち最高裁に)がなった。新聞部員募集となつてまずとまどつたのは中曾根悟郎さん(現外交官)等の優秀な上級生が何人か部員にしてくれと言つてきたことで、この時はたしか新聞は我々下級生でやるからとお引取り願つたように思う。我々同期も優秀な人間が集つた。これは当時左翼思想の学生運動が華やかな頃で学校新聞を通してその意思を発表したいという願ひから部員に応募した者も数人いて某日、広神君(現筑波大学)の家に集り、夜を徹して議論したりした。これは当然ながら学校の意とする新聞とは全く異なるので志が違ふ、と数人の優秀な同志が去つていったのは寂しかった。そういう中で第一号は二十四年某月、ほとんど私ひとりで編集、発刊したように思う。残念ながら私の手元に今はその新聞はない。ありがたかつたのは大塚先生の応援と内藤校長の理解もあり、学校から殆んど干渉されることなく、かなり勝手な、時には学校に対し反抗的な記事を書き自由に書かせてくれたことだった。その後田中一光、佐藤健と優秀な後輩たちに引き継がれ高々新聞は成長していった。過日、志村化工の社長になった佐藤収宏君は健君と同期(52期)の新聞部員である。最

近の高々新聞を見る機会は少い。是非高々生としての主張のある新聞を作ってもらいたいと願っている。
(東急観光高々営業所長 五〇回)

総会と消えた

キャンパス

田中 順

学而時習之 不亦説乎
有朋自遠方來 不亦樂乎
人不知而不愠 不亦君子乎
私達51期が第80回總會幹事をつとめさせていただき、締め括る御礼の言葉に引用した論語の一則である。当日、深尾清鉄先輩(12回)をはじめとし、昨年三月卒業の都築秀明君(80回)に至る、二百人の明治、大正、昭和三代に渡る同窓生を迎え、母校の今昔を写真パネルとして揭示し、現役のブラバンの諸君の応援を得て、その演奏をバックに、現役・OBの渾然としたセルリアンブルーと翠緑を奏唱した再会の宴は、どの様な山海の珍味にも勝るものであったと確信している。青春を勇躍させる新しい感激は新しい人生の三Fを喚起する糧になるに違いない。尾籠な話ですがお許し下さい。便所掃除は51期の誇りというが、旧制中学最後の入学生(第50回)として四年間、最下級生であったが故

訪中して

新井 浄

先日、第十回群馬青年洋上大学の団員として訪中する機会を得た。

天津、北京、上海の三都市を、五泊六日という強行スケジュールで廻り現代中国を少しでも垣間見ることができた。団員それぞれの感想は千差万別である。だが団員のなかから口をついてでてくるものは、「やはり日本が一番いい。」ということだった。だがそれほど日本がいいのだろうか。環境汚染、食品公害等、先進諸国がかかえている諸問題をかかえている日本がそれほどいいのだろうか? 貧しくともそれらがなかったような中国のほうがいいようにも見える。そしてそこには、大好きな自転車の道路があり、また男女平等下には充実した保育制度があった。何故だろう。そう私自身も、やはり日本がいいという気持ちになる。私には、それぞれの団員が共通前提にたつて渡航したように思える。日本と異なつた国へ。文化、生活態度もすべてそこに在るものが異なつていくという前提、だから私たちは、中国とはちがう、だ



ファイヤーストーム

小林 優公

の宿命でもあった。何故、生徒控所の渡廊下の便所しか思い出せないのだろうか。

戦後、間もなくの栄養不足の半熟な中学一年生には、強烈なショックを与えてくれた。一時は驚愕したものそこには自由奔放な精緻にして耽美な具象画と赤裸裸な熱願表現があり橘外男(12回)の世界があった。

真面目に一生懸命、掃除をしたのも別世界を垣間見る秘かな楽しみであったかも知れない。当局(?)が板壁からコンクリートの塊を叩き付けたような壁にしてしまっただけから私の便所掃除の記憶は消えてしまった。36年間の風雪と共に唾棄すべき便所掃除の記憶はどこにもない。

(高崎歯科医師会監事 五一回)

私は、激しい選挙戦の末、昭和四〇年七月生徒会長に就任した。以後一年の任期は、私にとって全く試練の一年であった。第一三回翠簪祭のファイヤーストーム中止に端を発し生徒心得の改正問題等、生徒会として取組まなければならぬ課題は山積されていた。学校当局との折衝において、生徒の意向は容易には受け入れられなかった。話し合いは、夜九時を過ぎることもあった。生徒会弱腰との厳しい批判も受けた。生徒の意向が反映されぬなら、生徒会長の職責を全うすることができない。生徒総会で学校当局に抗議したうえ生徒会長を辞任しようとは度考えたことか。勿論、その時は私自身高々を去る決意であった。

しかし、多くの友にめぐりあい励まされて、中途で高々を去ることなく任期を満了することができた。翠簪祭を毎年開催すべしとの公約実現にあたり、翠簪実行委員長として尽力した副会長の豊田建夫君は、自治省官僚から裁判官へ転身し、アメリカ法制研究のため目下アメリカに留学中である。副会長として私を補佐してくれた国峯陽一君は、志を貫徹されて医師となり、数少ない小児

心臓内科の権威者として活躍されている。生徒会役員として尽力された福島力君、白井博(旧姓関口)君、高橋愛明君、平山進一君はそれぞれ実業界の中堅として活躍されている。翠簪祭を毎年開催するとの公約を果し、大翠簪祭を前年度に引続いて開催したあの活力は今も私の心の糧として残っている。前夜祭のファイヤーストームで、ストームに荒れくるう全校生徒の收拾をはかるため奇しくも壇上に駆け上がり、「生徒会の歌」を高唱したことも忘れ得ない思い出である。

(小林法律事務所・弁護士 六六回)



から日本が一番いいという論理があったようだが、が、それ以上に、同じ人間が住んでいるという前提に立つて訪中ができなかったのだろうかと思う。団員それぞれが日本と中国の異なった部分にしか眼を向けようとせず、共通の部分をおさりにしてきたように思えた。新たな交流をめざして訪中した私たちと中国青年との対話は、この前提を浮きぼりしたようだった。彼らの答えは、四つの現代化、祖国の為に努力するということだ。団員たちには、「偉大な伝統の国」「民衆のエネルギーにあふれた国」というより、「国家財政の何倍もかけて、宮殿をつくる浪費国家」「思想統制、情報管理の国」という印象を与えたようだった。しかし、今、私たちが新たな交流をめざして、中国から何を学ぶことができ、そして何を与えることができるのか真剣に考える時が来ているというのは、おりしも日中国交回復十周年を迎えて、両国の青年が感じている共通認識である。その交流とは、たとえ国家体制が異なろうと、文化が異なろうと、私たちが身近な人々となにかを創り上げるように、両国の青年がなにかを創り上げてゆくことのようにだ。

(高崎市役所 七〇回)



論壇

これまでの二〇年
——これからの二〇年

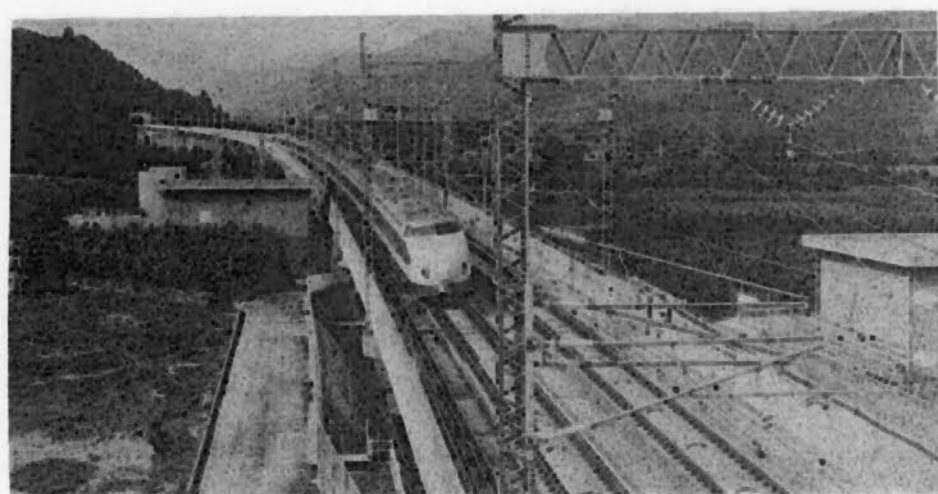
高 木 賢

早いもので、昭和三十七年に母校を卒業してからちょうど二〇年たった。この二〇年間というものは、高度経済成長の盛りで、世の中全体が大きく変化した。例えば、私が通学していた頃の高々のまわりはまだほとんど全部が田であったし、裏作には麦が作付けられていた。それがかなり前から住宅地と化してしまった。関越自動車道が開通し、また、上越新幹線も開通した。

もちろんこの二〇年を仔細にみると、前半の一〇年と後半の一〇年とは大きく様相を異にしている。昭和

和四八年の第一次石油ショックを境にして、資源の有限性がいやが応でも意識され、加えて熱帯林の減少などを契機に地球的規模で環境問題の重要性が認識されるに至った。しかし、総じてみれば、ハイレベルの経済成長が続き、我が国の生活水準は極めて豊かなものとなるなどこの二〇年間は恵まれた時代であったと概括することができよう。

だが、これからの二〇年はどうだろうか。二〇年たてば二一世紀になるということもあって、二一世紀を



展望した各種の未来論が盛んであるが、同時にそれだけ不透明な時代であることを物語っているともいえよう。しかも、それにはこの一〇年間にみられた資源、環境の制約が大きく影を投じている。加えて、我が国には、財政再建という特別の課題もある。国債発行残高は、九三兆円に達している。一方、政府がこれだけ持ち出しになっているのに景気の方は一向にはかばかしくなっていない。国内政治もこのような重苦しい状況を前にして必ずしも安定したものとなっていないことは、御承知のとおりである。

このような状況からすると、私には、今後の二〇年間は、世間でいわれるより更に厳しいものになるような気がしてならない。もちろん、これまでも厳しい見通しが各方面から指摘されてきた。

その第一は、いわゆる高齢化社会の到来である。人口に占める六五歳以上層の比率は現在では欧米諸国より相対的には低水準にあるが、二〇〇〇年頃にはほぼ西欧諸国並みとなった後、更に一段と上昇することとなる。

第二は、国際化の進展である。世界のGNPに占める我が国のシェアは二〇年前の三%弱から今や一〇%近くになった。貿易面等における地位の上昇も著しく、世界経済の枠組みの中にガッチリ組み込まれるに至っ

ているといえよう。こうした傾向は今後とも一層強まるものとみられ、世界経済の影響を大きく受けやすい状況となっている。しかしながら、私が先行きを危惧するのは、このような厳しい状況が予測されるということだけに由来するものではない。現在の我が国の風潮が軽薄に過ぎ、国家在立の基盤についての思いに足らざるものがあるのではないかと思われるからだ。

例えば資源問題。安上りということばかりに目を向けすぎて、国内の資源を有効に使い切っていないのではなからうか。世界全体の食糧需給は、二一世紀にかけて徐々に逼迫基調に向かうというのに安易に輸入に依存しようという主張が根強くみられることもその一つ。自国の存立の基盤となるべき重要部分は自ら培養するという基本姿勢が確立されておらず、安易な貿易立国論が横行しているだけなのだ。

世界の政治経済は今後とも大きく変化し、また、激しく揺れ動く。その中で日本が引き続き生存していくためには、今のような商業国家一本槍の行き方ではだめだ。古来、カルタゴなどの例にみられるように、単一商業国家は永続したことはないのだ。

(農林水産省大臣官房勤務 六一回)

京浜地区

上利 嘉野 34回

京浜地区在住の高崎高校同窓生は現在約二千五百名が同会員名簿に記載されている。同窓会は年二回、春の新入会員歓迎会と秋の総会を開催していたが、昨年から総会兼新入会員歓迎会として春一回にし、同時に機関誌「翠巒」を発行している。隔年発行の会員名簿は、今秋発行の予定であったが、来年本部発行の名簿に期待して見合わせることにした。今後は本部発行年の中間に一回発行することを考えている。

母校同窓生二万名の約13%が京浜地区に在住し、しかも元総理大臣を始め各界の名士多数を擁する当会は、名譽ある存在であり、母校全体としても誇り得るものである。ところが、最近五年間の新入会員歓迎会出席者平均値は、新会員が六十九名、既会員が五十六名、合計百二十五名になっており、年々減少の傾向がみられる。いつも幹事会では出席率の向上に種々手を打っているが、効果が出ないので頭を痛めている。

この同窓会をいかに発展させ、継続して行くかが目下の課題である。わが伝統ある同窓会の発展には、会員諸兄の絶大なる支持あるのみで、幹事一同この線に添って一丸となり、PR活動をして行く予定である。

関西地区

福田 一郎 31回

当地区に於ける、本年度の活動状況と申ししても、余り目立ったことはありません。

本年の総会は二月上旬に開催しましたが、出席者が例年に比して意外に少く、十名程でした。

総会後の懇親会は、恒例の如く高商と合同で行ない、同じ市内で学んだ者の気安さで、お互いに意気投合し、大いに氣勢が挙りました。

其の他年間の行事としては、県人会の主催する春夏の甲子園球場に於ける高校野球の応援、五月の汐干狩八月のビールパーティー等に参加しております。

高校野球と言えば昨年春の母校甲子園初出場を機会に、当地区同窓会旗を作製し、アルプススタンドにひるがえしましたが、再度旗の立つ日の早からんことを同窓生一同祈っております。

最後に、若い同窓生がどんどん当方面に進出されて、同窓会に活を入れて下さる様、期待しております。

高朋会

清水 豊 68回

高朋会は、言うなれば高々同窓会の県庁支部であり、総勢二百余名の会員によって構成される。

四〇・五〇は鼻たれ小僧と豪語しつつ会全体を力強くリードする高橋会長、国会当時と少しも変わらぬ元氣な姿は、まさに「進む健児の意氣高し」という翠巒の一節を象徴するものであり、会員諸氏の胸に熱い血潮を喚起してやまない。

相次ぐ氣象災害の被災地復旧に追われ息つく暇もない厳しい状況の中で、県庁はいよいよ「あかぎ国体」

に向かって本格的に動き始めた。我が高朋会もその例外ではなく、会員はさまざまな形で国体に関係している。或る者はヨット競技の責任者として東京都との連絡調整に奔走し、或る者は広報担当官として記者団との打合せに余念がない。そして我々も、公的には会場周辺の緑地環境整備に氣を配りつつ、私的には群響と共に開会式の音楽隊に参加するとい

う形の中で、及ばずながら一端を担わせていただくつもりである。

社会の複雑化に伴ない種々の難題に局面する県政の中にあつて、我が高朋会の会員に対する各方面からの期待は大きい。まさに「鍛えし腕を君見よや」の正念場である。

高崎市役所翠巒会

磯部 和男 51回

高崎市役所に在職する高崎高校同窓会員が集まって、中秋の名月の十月一日、高崎神社新生会館で「高崎市役所翠巒会」の設立総会を開いた。

同窓会員数は総勢百九十人という大世帯である。顧問に、市議会議員の中島正、吉村広治、友松敬三、浅貝正雄、塚越徹、植原寅吉、吉田伊三美、山田鏡宏の各氏を迎えている。

総会は、規約案を原案どおり満場一致で可決。続いて、役員選出に入り、会長に金井三行総務部長、副会長に越谷哲男都市計画部長と植原寅之助商工部長を選んだ。金井会長の挨拶、市議会議員を代表して塚越徹氏から祝辞をいただき、越谷副会長の閉会の言葉で、総会を終了。

懇親会は、顧問である安藤賢一消防長の乾杯の音頭で開宴となった。飲むほどに酔うほどに談論風発。王陽明の朋党論に「およそ君子と君子とは、道を同じゅうするをもって朋となり」というのがある。同じ学校で学び、同じ職場で地方自治の進展に努めている本会のごときは、真の君子の交りであろう。最後に植原副会長のリードで、全員肩を組み「翠巒を……」の応援歌を声高らかに歌い閉宴となった。

早稲田大学での

四年間

神戸 敏之

充実した毎日を与えてくれた早稲田大学に感謝するとともに、大学時代に得た友人達、先輩、後輩、そして、早稲田精神を大切に、社会の荒流に飛び込んでゆくつもりでいます。とにかく楽しく充実した四年間でした。(早稲田大学 七八回)

教育実習を終えて

丸橋 一博

ついこのあいだ、はじめての教育実習を終えた。附属小学校に十七日間、平均睡眠時間三時間というハードな毎日だった。しかし、もしこういう言い方が不適当でないとしたら、「教育」ということの重さ深さをほんの少しでも感じることができたように思う。

不安と期待の入り混じった複雑な思いで早稲田に入学してはやくも四年の月日が流れ、集まり散じてと校歌に歌われるように、卒業まであと半年となりました。振り返ってみれば、早稲田での四年間良き師、良き先輩、後輩、友人に囲まれ、実に良く遊び、学んで充実した日々を送ることができました。早稲田という大学は山手線の内側にありながら、日本中の人間を集め、都会とは思えない独特の雰囲気を作り出しています。そして、学生に様々な場を提供してくれ、学生は思い思いに自分の生活を楽しんでいます。私もゼミナールで金融論を学び、サークルは、政治経済研究会という堅いものとドルフインバスケッボールクラブという運動サークルに属し、時には厳しく、時に楽しく学生生活を送ることができました。もう少しで社会人として働くことになるわけですが、四年間の学生生活に全く悔いはありません。

授業とは一方的な知識の押しつけではなく、子供の自由な発想や考え方をまとめあげ、ねりあげてゆく過程である。そのとき、教室は壮大な世界観の実験室でなければならぬ。小さなひらめきや驚きや疑いが自由に響きあう場所でなければならぬ。そして、その創造的営みの組織者として教師はいるのだということ。自分が教える立場に立つと、一時

間の授業をつくることのたいへんさをつくづくと感じる。附小の先生も先生の指導のあいまに自分の教材研究を遅くまで続けた。これが教師の姿なのかと思う。子供の帰ったあとのだれもない夜の教室は、明日の授業をつくる教師たちの孤独な戦場にほかならない。そして翌日、再び子供達にむかいあうとき……。「教育」の深さ、「教師」という職業のおそろしい重さを実感した二週間だった。(群馬大学 七九回)

ラグビー一色

村田 毅

私が塾体育会蹴球部に入部して以来、早くも三年目を迎えました。幸い昨年はレギュラーとなれ、二年生ながら公式戦全試合に出場することができました。また暗れの早慶戦でトライすることもでき満足のいくシーズンでありましたが、同時に自分の力量のなさを思い知らされました。今年は春先に病気を患い入院するというアクシデントがあり、やや出遅

れましたが、後半戦の出場にむけてトレーニングを積んでいるところで。現在の生活はラグビー一色ですが、好きで始めたことなので仕方ないのかもしれない。(慶應大学 七八回)



高々をみまもる

風と緑の観音山丘陵

観音山丘陵——高々で学んだ同窓生にとっては、親しみのある丘陵にちがいない。四季折々に変化してみせるやかな丘陵には、数多くの文化財が点在している。豊富な緑とともに、高々を背後からつつんでくれるこの観音山丘陵は、高々のすぐれた教育環境を構成する大切なファクターである。そこで今号から、高々の学園生活のなかで、折りにふれて歩き、遊んだことのある観音山丘陵の自然、文化財、史蹟等を紹介してみたいと思います。

野鳥の森

観音山野鳥の森は、野鳥の保護と、緑の保護を計るために設置されたもので、白衣観音の北側の約二十ヘクタールの国有林内にある。約九十種の野鳥が棲み、園内には資料展示のバードハウスがあり、千五百メートルと四七〇メートルの二本の探鳥コースが出来ている。自然と人間とのコミュニケーションの場として市民に親しまれている。



清水寺

清水寺は観音山の東山腹にあり、五三六段の石段がある。大同三年（八〇八）に坂上田村麿が蝦夷征伐に倒れた戦士の霊を祀るために創建したと伝えられている。観音堂の回廊には狩野常信らの大きな絵馬が奉納されている。また、田村堂は、下仁田戦争で戦死した高崎藩士三六人の木像が安置されている。清水寺は古くからの霊場として、人々の信仰をあつめ、上野三四番の観音札所の最終の納寺となっている。



翠巒文庫(その一) 角田匡己 (五三回)

図書室の一隅にガラス戸の書棚があります。卒業生の皆さんが書きになった本が寄贈されていていっぱい詰っています。二百三十冊にもなるでしょう。保存ということも考えて、一般帯出を禁じ、必要な時は係員の鍵で出し入れしてもらいます。名づけて、翠巒文庫。今回は、それらの書物を受付順に紹介し、各方面での御活躍ぶりを披露いたします。

書名

著者

水とボイラ	石上 儀平
船舶・車両ボイラの洗浄	市川 清
天神様	関根平八郎
歌集 二つの庭	山田 英
日本力	原 一雄
歌集 阿修羅	村上 成之
歌集 翠微	吉田 信重
歌集 朝霜	大手 拓次
大手拓次全集(全四巻)	駒林 邦男
思考力形成の授業	
ソビエト児童心理学	
数学的能力の構造	
磁気と人生	船渡川善哉
歌集 瓦日	吉田 信重
上毛うたの旅(上下)	田島 武夫
句集 泰山木	
田島武夫短歌作品抄	
年刊歌集	群馬県 歌人クラブ

群馬県高等学校野球大会史	石原勝三郎
はばたけ青春	門倉 詠
サークル活動への招待	
おれたちの青春	
きれぎれの愛と死	
詩集 十二月の鬼火	
詩集 裸のひまわり	
愛と生きがいの出発	
南北米見聞記	安藤 賢一
利根と上州(下)	五十嵐徹夫
Technical report a guide to carp culture	
群馬県資料集古城誌篇	山崎 一
文章の教室	門倉 他
故郷はなれて	
万葉集私注(全二十巻)	土屋 文明
青春	山田 博久
大手前の子	田中友次郎
高崎女子高校歳時記	
土曜クラブ誌	
北の島	近藤 良夫
ダイカスト技術入門	植原 寅蔵



◇ 母校だより ◇

- 第36回高々・前高定期戦・大逆転V2
- 運動部報告・頑張ってます
- ラグビー部・22年ぶりに全国大会出場!!
- 学芸部活動報告
- 最近の進学状況について



第三十六回 高々・前高定期戦

大逆転V2

伝統の高前定期戦36回の歴史の中で、今年ほどの大逆転勝利がなかったであろうか。今年の戦いはそれほど苦しく、厳しかったのです。

まず、9月18日に水泳と野球が行われました。水泳は、部活が国体のため中止となり、一般対抗のみで行われ、一年生が健闘して3点を挙げましたが、二・三年生が敗れて3対6。野球も小さなミスが重なり、本来の力を発揮できぬうちに敗れ、その時点で3対12と、前高に9点のリードを許してしまいました。28日の本大会も、午前中の一般対抗では、気合は前高を圧倒していたのですが得点は伸びず、一時は22点差まで離されて、私も坊主頭を覚悟しました。しかし、一般最終種目の玉入れで9対0と完勝し、それが沈みがちだった高高生を燃え上がらせ、午後の部対抗では、総体準優勝の実力に加え、一般生徒全員が丸となっての応援の力で前高を押し切り、結局86・5対66・5で、奇跡とも思える大逆転勝利を収めることができたのです。しかし、勝負のついた後とは

いえ、最後のバスケットで見せた前高の執念・最後まで全力を尽くした見事な戦いぶり、敵ながらあっぱれと言え、素晴らしいものでした。

(実行委員長三年 松井照明)

第36回高々前高定期戦

	水泳	野球	ラグビー	柔道	剣道	サッカー	弓道	硬庭	軟庭	バレー	バスケット	卓球	陸上	駅伝	玉入れ	綱引き	小計	総計
一般対抗	高々3								3	5	6	2	3	1.5	9	0	32.5	高々
前高	6								6	4	3	7	6	7.5	0	9	48.5	86.5
部対抗	高々0	6	6	6	6	0	6	6	6	6	0	6	6				54	前高
前高	6	0	0	0	0	6	0	0	0	0	6	0	0				18	66.5

35回までの成績

回	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
年	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56
高々	○	○	○	×	○	×	○	○	×	○
前高	×	×	×	○	×	○	×	×	○	×

最近10年
高々、7勝3敗
通算
高々 18勝13敗3分



運動部報告

頑張ってます

春の県高校総体（兼関東大会県予選）では昨年同様総合二位、9競技が関東大会出場と大活躍をしました。全国大会（鹿児島）はバスケット部、軟式庭球部が会場。そして「くにびき国体（島根）」にサッカー部2名、バスケット部3名の選手が本県代表として出場して居ります。また、軟式庭球部では、県下（個人、団体）8タイトル中7タイトルを独占し、その偉業は前例をみないものとして実力を高く評価されております。進学校において運動部がこれ程活躍し、その実績が高く評価されているところは他に多くはないと思います。今後とも甘んずることなくより一層努力し、全国へと飛躍するべく各部ともに頑張ってます。

児島）一回戦
バレーボール部・新人戦、県総体、全国県予選、国体県予選各三位、関東大会（大泉）五位
サッカー部・新人戦優勝、県総体二位、全国県予選四位
陸上部・新人大会200m二位22・7
丸山龍雄、県総体400m二位49・9
藤由久、三位50・4丸山龍雄、600m一位総合五位、学校対抗一部400m一位50・1加藤由久、200m三位22・7丸山龍雄
軟式庭球部・新人戦個人団体優勝、全国選抜県予選個人団体優勝、選抜関東地区三位、全国選抜三位 県総体団体優勝、個人三位、関東大会（宇都宮）団体三位、個人四回戦、全国大会（鹿児島）団体一回戦、個人四回戦、一年大会個人優勝
硬式庭球部・新人戦個人S八位、D四位、S16位、全国県予選出場
剣道部・学校対抗ベスト16、一年大会ベスト16、新人戦二位、県総体四位、関東大会（沼田）出場、全国県予選三位、学校対抗ベスト8
柔道部・新人戦、関東選抜県予選三位、関東新人大会（講道館）出場、学年別個人三年三位、県総体団体三位、関東大会（甲府）出場、全国県予選団体五位、個人八位
水泳部・県総体総合三位、400mR、400R二位、関東県予選100自、100m二位高橋直一郎、800R三位、関東大会（千葉）400m一位高橋律行、新人戦400R

ラグビー部
22年ぶりに全国大会
出場!!

全国高校総体の一環として大阪・花園で行なわれる第六十二回全国高校ラグビーフットボール大会に、高々ラグビー部が二十二年ぶりに出場する。県大会で農大二高を降しての出場。通算六回目の全国大会である。大会は十二月二十八日より開催される。



学芸部活動報告

本年度は、全国大会に出場した二つの部活を紹介致します。

将棋部・県大会団体戦に黒沢、依田、秋山の三名が出場し、富岡、中央、前橋の各学校を破り、県大会で四度目の優勝を果たした。全国高校将棋選手権大会が、八月十三・十四、三四の代表校を東京に集めて、トーナメント方式により行なわれた。広島大付属、佐野、札幌南にそれぞれ勝ち進み、準決勝で惜しくも新田高校に破れ、全国で団体第三位となる。放送部・全国高校放送研究会とNHK共催の、全国高校放送コンテストが、毎年八月に行なわれている。放送部は過去十年間、連続して県代表として全国出場を果たしている。昭和五十二年度は全国第六位に食い込む。今年も、アナウンス、番組制作部門で県代表に選ばれた。

（学芸部長 田島秀雄 四一回）



（将棋部 全国3位）

最近の進学 状況について

昭和五十四年に共通第一次学力試験が実施されて以来、年々八割以上をとる高得点者が増加して、国公立大学の合格平均点が上昇しております。特に本校生徒の多くが志望する有名校の難化は、各大学の二次試験科目の重視傾向とともに想像以上になっております。また、有名私立大学の難化も場合によっては、国公立大学以上ともいわれており、現役合格のための苦戦が続いております。

このような状況に、学校としては、二年生からある程度文系理系のコース制を選択する授業を組んで対応し、生徒自身も将来の進路に対する情報を集め早めに目標を定めて勉強を始める風潮も出てきております。

さて、今年も三百余名の生徒が共通一次の出願を終え、早大、慶大等への推薦入学者も内定し、受験戦線が俄かに忙しくなってきました。

運動面でも県高校総体の総合成績県下二位、対前高定期戦の勝利など快調に今年度の在校生は成果をあげてまいりましたので、その余勢を駆って、進学にも好成績をあげてくれるものと期待いたしております。

(進路部長 経徳弘廉)

進 学 状 況 (全日制)

() は現役

種別合計 (全日制)

大学	55年	56年	57年	大学	55年	56年	57年
北大	6(1)	5(2)	5(0)	高経大	39(21)	35(16)	44(15)
東北大	23(10)	20(12)	24(13)	早大	58(15)	65(16)	54(21)
東大	8(5)	10(5)	4(2)	慶大	33(5)	35(12)	19(7)
一橋大	3(1)	2(0)	4(2)	中央大	42(12)	57(16)	44(14)
東工大	4(2)	7(5)	2(0)	明治大	53(12)	55(16)	57(16)
千葉大	10(4)	7(4)	5(3)	日本大	22(5)	36(4)	24(3)
京大	2(1)	8(5)	1(0)	上智大	9(3)	12(5)	7(1)
新潟大	19(8)	12(10)	8(6)	法政大	26(4)	28(3)	17(4)
筑波大	4(4)	6(5)	6(4)	立教大	11(2)	25(9)	16(5)
金沢大	2(0)	6(4)	7(5)	東京電機大	11(1)	10(1)	4(0)
東外大	6(3)	1(0)	5(2)	東京理大	34(14)	41(14)	44(8)
群馬大	58(40)	60(38)	58(34)	芝浦工大	6(0)	7(2)	5(1)
横国大	6(2)	10(7)	5(2)	成蹊大	9(1)	7(2)	10(2)
静岡大	3(2)	0(0)	2(1)	学習院大	10(1)	6(2)	8(1)
山梨大	0(0)	1(0)	1(0)	青山学院大	27(6)	25(12)	21(9)
埼玉大	6(3)	4(2)	3(0)	武蔵大	12(0)	2(0)	6(0)
信州大	6(3)	5(4)	4(1)	同志社大	11(5)	3(1)	6(2)
横浜市大	1(0)	2(2)	0(0)	立命館大	9(0)	10(0)	4(0)
				その他	200(52)	163(35)	162(43)

進学率 合格者数 合格者数	現役進学者数	卒業生数	総計(延数)	D短大、各種他	A+B+C	C私立	B公立	A国立	大学別
47.1%	190	403	794 (260)	7 (6)	787 (254)	536 (126)	52 (26)	199 (102)	55年
48.0%	185	402	807 (277)	8 (7)	799 (270)	563 (138)	45 (20)	191 (112)	56年
40.7%	161	405	710 (230)	8 (3)	702 (227)	471 (122)	61 (22)	170 (83)	57年

全国大会報告

●サッカー部

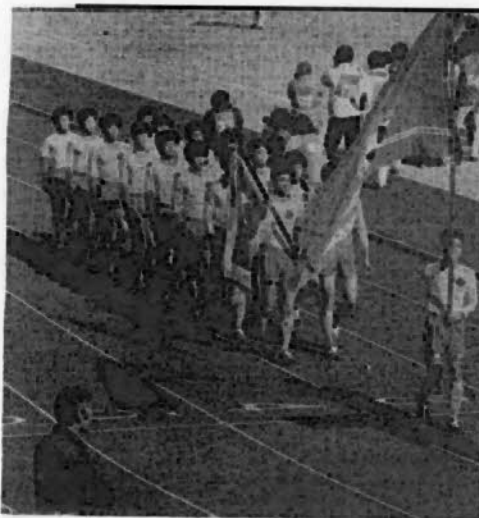
原田光男

(六〇回)

全国から集まった精鋭五十チームを祝うかのように青く澄み渡った昭和五十七年一月一日の東京国立競技場の空。群馬を代表する高崎イレブンは校旗を先頭に胸を張り威風堂々と入場した。受験を目前に控えた三年生、又彼等の心を察し必勝の意気に燃える一・二年生。各自それぞれの思いを抱いての行進であったことだろう。

三回戦で強豪の帝京に敗れたとはいえ、前の戦いに勝利を収め胸躍競技場に翻る校旗と共に校歌を歌えたことは後に続く者に大きな自信を植えつけることとなった。

来年の選手権予選もすでに始まり「走れ高崎! 燃えろ青春!」のもとに連続出場を目指して猛練習に明け暮れる日々が続いている。サッカーに青春をかける若人に栄光あれ。



維持会費納入の お願い

維持会費の納入をなんとか促進したい、納入額の増加が同窓会活動を盛んにする基盤となるという観点から、常任理事会等での討議を経て、今年は「期別納入一覧表」を作成してみました。ご存知の通り、今年度から維持会費は一口二千元以上と倍額になりました。納入者数に響くのではないかと懸念されたのですが、会員の皆様のご理解ご協力によりまして、表の通り、ここ数年増加しつつあります。また納入総額につきましても今年度は一挙に四百万円台に突入いたしました。御礼申しあげますとともに、今後共、同期生等声をかけあいまして御協力の程お願い申しあげます。総会担当幹事の期、および新卒業生の期と、二つの山が過ぎましてたくさん納入していただいております。

なお、未納の役員の皆様には督促状等お送りいたしました恐縮です。会長三万円、副会長二万円、常任理事一万円、理事五千元と、役員の皆様には多大のご負担をおかけしておりますが、趣旨ご理解の上、今後とも御協力いただきますようお願い申し上げます。

(昭和57年度分) 同窓会維持会費納入状況 (昭和57年10月31日現在)

期別	人数	金額 (単位千円)	20	9	18	32	17	55	44	31	89	56	35	77	68	21	45	80	66	136
5	1	2	21	16	32	33	21	66	45	24	68	57	18	38	69	36	76	通信制	17	34
10	1	2	22	11	22	34	10	29	46	33	98	58	23	62	70	20	43	定時制	14	37
11	1	2	23	3	6	35	9	32	47	28	87	59	19	39	71	30	67	不明	3	6
12	2	12	24	11	47	36	14	40	48	11	37	60	23	55	72	36	79	年度別納入状況 50年 1,270,000円 51年 1,207人 1,640,000円 52年 1,489人 2,010,000円 53年 1,012人 1,368,000円 54年 1,361人 1,960,320円 55年 2,485,000円 56年 2,573,780円 57年 1,626人 4,127,000円 57年役員 156人中127人納入 939,000円		
13	1	2	25	8	26	37	13	29	49	35	111	61	22	52	73	23	50			
14	3	17	26	17	49	38	18	51	50	50	133	62	25	74	74	29	60			
15		10	27	13	28	39	10	28	51	60	151	63	22	46	75	27	54			
16	2	7	28	15	54	40	21	62	52	57	136	64	22	67	76	48	99			
17	5	10	29	16	85	41	26	68	53	22	60	65	24	60	77	47	94			
18	1	2	30	16	61	42	26	87	54	32	90	66	24	50	78	58	120			
19	6	13	31	22	55	43	22	56	55	35	100	67	28	70	79	56	112			

●軟式庭球部

茂木道弘

(七〇回)

さる三月二十六日、七の両日、埼玉県上尾市で開催された第七回全日本高等学校団体選抜軟式庭球大会において、高崎高校軟式庭球部は第三位入賞という成績を収めることができました。先輩各位の御指導、御支援の賜と厚く御礼申し上げます。

本大会の初戦は九州代表塩田工高(佐賀)と対戦、三対〇で快勝、続く準々決勝は、近畿代表上宮高(大阪)に二対一と逆転勝ちしてベスト4に進みましたが、準決勝では関東の雄成東高(千葉)に敗れました。

六月五、六日、栃木県黒磯市に於いて開催された関東大会で、成東高に借り返して、八月上旬、全国大会の会場、鹿児島市へ乗り込みましたが、結果は振いませんでした。

高々軟庭部への倍旧の御支援をお願い申し上げ、御報告と致します。



昭和56年度 高々同窓会経常会計報告
(昭和56年1月～12月)

収 入 の 部			
費 目	昭和56年予算	実収入	備 考
前年度からの繰越金	527,618	527,618	
入会金	830,000	818,000	全日制404通信制10
維持会費	2,000,000	2,573,780	
利 息	20,000	59,985	
合 計	3,377,618	3,979,383	

支 出 の 部			
費 目	昭和56年予算	実支出	備 考
会議費	110,000	239,620	総会
祝賀費	130,000	124,540	卒業証書筒
餞別費	150,000	310,000	転出職員への餞別
庶用費	100,000	72,000	香典・花輪
通信印刷費	300,000	355,760	ハガキ、切手、振込用紙
旅 費	70,000	70,200	京浜同窓会出席
總會通信印刷費	1,000,000	877,730	總會通知等発送 (12,539通)
同窓会報費	180,000	312,000	同窓会報印刷
事務費	600,000	592,850	人件費
井上・真木・同窓会長賞費	100,000	46,000	カップ
雑 費	50,000	10,000	御見舞
予備費	587,618		
同窓会基金へ		500,000	
次年度への繰越		468,683	
合 計	3,377,618	3,979,383	

昭和56年度 高々同窓会特別会計
(同窓会基金) (昭和56年1月～12月)

収 入 の 部		支 出 の 部	
費 目			
前年度からの繰越	3,025,359	な	し
利 息	137,399		
原・高橋両氏より	200,000		
昭和56年度経常会計より	500,000		
合 計	3,862,758	残高合計	3,862,758 (高崎信用金庫西支店 定期)

昭和57年度 高々同窓会経常会計予算案
(昭和57年1月～12月)

収 入 の 部		
費 目	昭和57年度予算	備 考
前年度からの繰越金	468,683	
入会金	830,000	全日制405通信制10
維持会費	2,500,000	
利 息	20,000	
合 計	3,818,683	

支 出 の 部			
費 目	昭和57年度予算	備考	○増 △減
会議費	250,000	○	140,000
祝賀費	150,000	○	20,000
餞別費	300,000	○	150,000
庶用費	100,000		0
通信印刷費	400,000	○	100,000
旅 費	80,000	○	10,000
總會通信印刷費	1,000,000		0
同窓会報費	350,000	○	170,000
事務費	600,000		0
井上・真木・同窓会長賞費	100,000		0
雑 費	50,000		0
予備費	438,683	△	148,935
合 計	3,818,683	○	441,065

昭和57年1月 日

高々同窓会校内幹事会計

増村 博 原田 光男 茂木 道弘

「クラブ活動振興基金」

30,000,000 (群馬銀行 高崎信用金庫 定期)
利子は管理委員会 (委員長 同窓会長) が運営する

昭和56年
庶務報告

56年2月27日〈金〉 常任理事会

4月23日〈木〉 本部幹事会

4月27日〈月〉 常任理事会

5月27日〈水〉 京浜同窓会

6月13日〈土〉 本部幹事会

9月3日〈木〉 本部幹事会

9月26日〈土〉 常任理事会

9月26日〈土〉 本部幹事会

10月8日〈木〉 本部幹事会

11月19日〈木〉 本部幹事会

11月21日〈土〉 理事 高松 高松 高松

12月16日〈水〉 本部幹事会

57年1月13日〈水〉 常任理事会

高崎高校第一会議室

高崎高校第二会議室

高崎タカシマヤロース

高崎 高松 高松 高松

高崎 高松 高松 高松

高崎 高松 高松 高松

高崎 高松 高松 高松

高崎 高松 高松 高松

高崎 高松 高松 高松

高崎 高松 高松 高松

高崎 高松 高松 高松

高崎 高松 高松 高松

高崎 高松 高松 高松

高崎 高松 高松 高松

高崎 高松 高松 高松

事務局だより

御寄贈ありがとうございました

57・9・10 宮下隆二氏(三八回)

NECのPC8801パーソナルコ

ンピューター四台(ディスプレイ付)

およびプリンターとテープレコーダ

ー(計一三〇万円相当)。教育工学

部コンピュータ室に配備して活用

させていたいております。

57・11・18 海老原英吉氏(三三

回)十万円。法務大臣表彰記念とし

て。御榮譽お祝い申しあげます。

住所変更された会員の方へ

本会報が旧住所に届いたと存じま

す。新名簿用の調査カードは出版社

の方へまわっているため、今回は事

務局の従来の原簿にもとづいて発送

いたしました。来年度新名簿完成の

際には、会報も新住所にお届けで

ますので、本年は御了承下さい。

編集後記

前号より幾分早くお届けでき、編

集者一同ほっとしております。御多

忙の中、御寄稿頂いた皆様に感謝申

しあげます。前号の十頁から更に増

頁できました。会員諸兄の一層の交

流の一助ともなれば幸いです。なお、

御近影等頂けなかった方々には、写

真を掲載できませんでしたが御了承

下さい。(本部幹事会)

高崎高校同窓会報 第十六号 発行日・昭和五十七年十二月五日
発行・高崎高校同窓会 編集・本部幹事会 印刷・出版あさを社